

沢木耕太郎の旅エッセイ集「旅のつばくろ」(新潮社)を読んだ。この中にひと旅をする十六歳の沢木が津軽半島の龍飛崎に向かい、途中で引き返す話が出てくる。それから五十年以上が過ぎた夏、十六歳の自分が龍飛崎に立ったときの感概を想像しながら、沢木は再び龍飛崎へと向かう。カバンの中には太宰治の「津軽」が入っている。

念願叶い龍飛崎に立つ。だが、「強い風の吹く中、いくら立ち尽くしても、少年のときの思いを甦らせることはできなかつた」と述懐する。かけがえのない十六歳の沢木は、そこにはいなかつたのだ。

「あのとき引き返していなければ」と思つたかどうかは分からぬが、ふと、学生時代の一コマが頭に浮かんできた。

当時の私は弘前に住み、ゼミ仲間と初

めて龍飛崎を訪れた。季節は初夏だったと思う。風もなく晴天に恵まれ、崎の端に立つと、はるか向こうに北海道が見渡せる。雄大な自然を前に「ここが津軽海峡、この下に青函トンネルを掘っているのか」何かとてつもないものに飲み込まれた。なぜかとてつもない気がした。

青函トンネルができる久しい。函

館まで新幹線も通つた。崎の端には

「津軽海峡冬景色」の歌碑が建つてい

ると聞く。もし今、龍飛崎に立つた

ら、五十年以上の歳月が流れしたことになる。あのときの感慨が甦るだろ

うか、それとも新たな感概が湧いて

くるのだろうか? 「旅のつばくろ」が旅

情を誘う。

(其田敏美)

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿
を募集します。文学館友の会事務局ま
で、お送りください。

5月1日(水)より、会員登録用紙

を提出して下さい。

新年度は写真展「星野道夫」でスタート

2021年度展示

秋は「ぼのぼの」

は写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」で始まります。星野道夫氏は、アラスカの大西洋に生きる人間や野生動物、そして語り継がれる神話に魅せられた写真家です。取材中の事故で亡くなるまで、心打つ大自然や動物の写真を撮り続けました。本展では20歳で初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から、亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャツカ半島での写真など、星野氏自身のことばとともにご紹介します。

夏休みこども文学館は、昨年コロナ感染拡大防止のために延期をした「みちのく妖怪ツアーアー」展を、児童文学館にて開催します。主人公のラッコ「ぼのぼの」お氏の代表作「ぼのぼの」の連載35周年を記念して、特別展「ぼのぼのたちの杜」を開催します。

秋は仙台在住の漫画家・いがらしみきお氏の「ぼのぼの」の連載35周年をはじめ、「シマリスくん」や「アライグマくん」など個性的なキャラクターが繰り広げられる佐々木ひとみ、野泉マヤ、堀米薫各氏のご協力のもと開催します。

お氏の代表作「ぼのぼの」は、仙台市青葉区北根2丁目7の1電話 022-(271)3020仙台文学館ホームページ https://www.sendai-li.jp/

◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」1月10日(月・祝)~2月13日(日)◆企画展「高山鶴牛と土井晩翠」1月15日(土)~3月21日(月・祝)

*タイトル、会期は予定です

◆写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」4月17日(土)~6月27日(日)◆夏休み企画「こども文学館えほんのひろば」「みちのく妖怪ツアーアー」展7月17日(土)~8月22日(日)◆特別展「ぼのぼのの連載35周年記念「ぼのぼのたちの杜」9月18日(土)~11月28日(日)

文学の杜 仙台文学館友の会会報 第65号

令和3年3月20日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022-(271)3020

仙台文学館のホームページ

https://www.sendai-li.jp/

oiigashimiki o 竹書房

（近）

（和）

（佐）

Photo by Ryuuji Sasaki

（近）

（和）

（佐）

（近）

<p

「佐伯一麦 北根ダイアローグ 2020」

—歌人 小池光に聞く—

文学をめぐる対談の醍醐味を味わう

佐伯館長が各分野の方を迎えて対談する企画がスタートした。第一回は、歌人小池光氏を迎えて、仙台文学館新旧館長ダイアローグとなつた。

佐伯館長が、仙台文学館の場所が良く分かることを話すと、小池氏は「この頃は駅からタクシーに乗つてもすぐ分かるようになつて来たね」と応じて、まずは文学館が認知されたことを喜び合う。

前任の館長としての感想を問われる、と、小池氏は「スタッフが優秀なので、笑いを誘い、そこに新館長への心遣いと励ましが見えて、ふと場が和むのを感じた。

文学館の講座に話題が進み、短歌講座の様子が小池氏のユーモアに包まれた轟落な語り口で紹介される。「短歌の第一歩は大胆にスパッと削り落して行くこと」などだが、作者は自分の言葉に愛着があるため、なかなか削ることができない」と。「短歌であれ、散文であれ、文章表現には発想、テーマがまずあってそこから始まる。発想は音楽で言えば作曲のようなもの。その曲をどう聞き手に伝えるかが演奏者の腕にかかる。つまり文章で言えば言葉を削つたり、順番を入れ替えたり、リズムやテンポを考えたりすること。文学者は作曲と演奏の両方の役割を担うんですね」と佐伯館長。

こうした文学をめぐるやりとりは、いくつもの層から成り立ち、深みを帶び、聴く者に對談の面白さを充分に感じさせてくれた。次回への期待が膨らむ。

文学表現に関する言葉の数々が、印象深く心に残つた。

①自分の中に他者を置く。作品に自己陶酔してはいけない。

②作品を寝かせる。一晩おくだけでも見えることがある。

③言葉は單なる言葉ではなく、そこにニュアンスを含めるのが文学。

④ありふれたもの、言葉にならないものに言葉を与えて行く。

⑤作品は生きもの、超絶技巧の工芸品ではない。

⑥表現は人間が問われるものである。

2020年11月22日開催 (佐)



『腹を抱へる』

丸谷才一

本を片手に



丸谷才一エッセイ傑作選1

イヤホンをして、耳に心地よい音楽を選ぶ。そして、おもむろにページを開く。

といつても持ち重りのする単行本では無い。旅にはやはり文庫本だ。小説もいい。読んでもいい、つまり薦が不要なのだ。

葉って、読んでいて落としたりしませんか。私はよく落とします。狭い機内だと拾うのが大変です。だから、ぱつと開いたところから読み始められる。これがいいのです。そして、どこを読んでも面白くて興味深い。突っ込み甲斐も結構ある。

例えは「酒中闇談」は酒の席でいかにこまつて画面を見ている自分に気付いたンの設定に手間取り、緊張もした。しかしもした。でも今は、その国の、その地方の名物などを用意して、食べたり飲んだりしながらラツィアに参加している。こ

んなことが無ければ、アフリカのサファリや北極圏オーロラツアーナどは実現しなかつたと思う。

さて、例えはそれらが実現したとしない。現地までは、たぶん飛行機でしようね。機上での長い時間をどう過ごすか。機内食を食べるとき以外は、連れがいても案外話さないものだ。連れがアイマスクなど持ち込んでいたら、もう黙つていらしかい。映画を片つ端から見るという手もあるが、結構飽きてくるものだ。そんな時は読書に限る。

『腹を抱へる』
丸谷才一エッセイ傑作選1 文春文庫
例となつた新春ロビーエン「100万人の年賀状展」(仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催)を開催した。当初は、例年通り11月までの予定が、好評のため14日までナウイルス感染症拡大防止のためリモートでの開催になつた。ソーシャルディスタンスをとり50人が席に着いた。何せ文学館としてはリモートは初めてのこと。会場いっぱいに緊張感を漂わせながら全員の拍手で始まつた。東京の広瀬さんのお顔が映し出された。「没後10年を経ても、絵本作家、エッセイストとしての佐野洋子の人気は衰えないと見えていた。そんな佐野さんを語つていきましょう」と館長からひと言。広瀬さんは「10年は短い気がする。イメージカラーリングはシヨッキンゲビング。ボスターもそんな風に。展示資料の中にはメモやスケッチ用に活用していた東見本のひこと。」

江國さんは「クスッとニヤッさせられる作品が多い。エッセイのタイトルもユニークで、それだけで光り輝いている。文も絵も挿絵も書ける人は少ない」と。最後に「空とぶライオン」「シズコさん」「神も仮もありませぬ」「死ぬ気まん」とお薦めの本をあげて終了。

展示室に向かう人や、グッズや書籍販売に足を止める人が多くマスクの奥に満足の笑顔が見えた。

(二)

来年は節目の第20回を迎える。

作品の総数は、前年を200点近く上回るおよそ700点が寄せられた。遠くは神奈川、静岡、兵庫、広島などからも届いた。

今年は、新型コロナウイルスの収束を願つた内容のものが多くの妖怪アマビエを描き、疫病退散の文字が添えられたものなどが寄せられた。テーマ部門の「コロナ禍の後、これがやりたい」には、孫に会いに行きたい、満員のスタジアムで大きな声でイーゲルスの応援をしたい、海外にいる家族のもとに里帰りの旅がしたいなど、それぞれの思いがしたものだ。

来年は節目の第20回を迎える。新春の

会員の感想は次のとおり。
・切り口鋭い
・エッセイではないが、

次回読書会は4月14日(水)14時
小川糸「ツバキ文具店」(幻冬舎文庫)

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。



第46回読書会

大人になつた息子の現実

スタインベック「逃走」

「アメリカ文学の巨人」と言われ、彼の作品は「西洋文学の古典」とも称される。

1962年にはノーベル文学賞を受賞している著者の短編である。

カリフォルニアの荒れ果てた海岸にへばりつくような農場で暮らすトーレス一家。母親は19歳のペペが大人になるのを待つていて。

ある日ペペは不覚にも殺人を犯してしまい、追つ手を逃れて帰宅した。決然と

言葉の裏に人間への鋭い洞察

佐野洋子「神も仮もありませぬ」

イラストレーター、絵本・童話作家、エッセイスト、小説家として活躍し、2010年に亡くなつた著者の、小林秀雄賞を受賞したエッセイである。

著者的人間関係が飾ることなく自然体で書かれ、言葉の裏に他者のへの思いやりが垣間見える。

会員の感想は次のとおり。
・切れ口鋭い
・エッセイではないが、

第47回読書会

佐野洋子「神も仮もありませぬ」

著者的人間関係が飾ることなく自然体で書かれ、言葉の裏に他者のへの思いやりが垣間見える。

会員の感想は次のとおり。
・切れ口鋭い
・エッセイではないが、

日常的で同調できる部分もあつた。

年をとつても変らない人のよう

で、あまり面白がさなかつた。それともう自然体で書かれ、言葉の裏に他者のへの思いやりが垣間見える。

会員の感想は次のとおり。
・誰でもそなんだと安心し、自分も今

の生き方でいいのだと思えた。

孤独なようではなく、読みやすいと思った。

誰でもそうなんだと安心し、自分も今

の生き方でいいのだと思えた。

孤独なようではなく、読みやすかった。

誰でもそうなんだと安心し、自分も今

の生き方でいいのだと思えた。

孤独なようではなく、読みやすかった。

孤独なようではなく、読みやすかった。

「佐野洋子を語る」

リモートで開催

1月30日(土)エッセイスト佐野洋子展にちなんでトーケイベント「佐野洋子を語る」が開催された。本来なら東京から佐野洋子さんの長男であるイラストレーターの廣瀬弦さんと、作家の江國香織さんをお迎えして、佐伯一麦館長がお話をうながすがさなかつた。その男に変わったことを母親は見のがさなかつた。逃走が始まる。心理描写を削ぎ落とし、逃走の過酷な情景だけが克明に描かれ、その臨場感に緊張する。追つ手の影、崩れ落ちる馬、かすめる銃弾、コヨーテの叫び、迫る危機から脱出しようと苦闘する息子の姿が、なぜかそこに居ない母親の深い悲しみを見せるのだった。

12月9日、5名出席。(佐)

1月30日(土)エッセイスト佐野洋子展にちなんでトーケイベント「佐野洋子を語る」が開催された。本来なら東京から佐野洋子さんの長男であるイラストレーターの廣瀬弦さんと、作家の江國香織さんをお迎えして、佐伯一麦館長がお話をうながすがさなかつた。その男に変わったことを母親は見のがさなかつた。逃走が始まる。心理描写を削ぎ落とし、逃走の過酷な情景だけが克明に描かれ、その臨場感に緊張する。追つ手の影、崩れ落ちる馬、かすめる銃弾、コヨーテの叫び、迫る危機から脱出しようと苦闘する息子の姿が、なぜかそこに居ない母親の深い悲しみを見せるのだった。

1月30日(土)エッセイスト佐野洋子展にちなんでトーケイベント「佐野洋子を語る」が開催された。本来なら東京から佐野洋子さんの長男であるイラストレーターの廣瀬弦さんと、作家の江國香織さんをお迎えして、佐伯一麦館長がお話をうながすがさなかつた。その男に変わったことを母親は見のがさなかつた。逃走が始まる。心理描写を削ぎ落とし、逃走の過酷な情景だけが克明に描かれ、その臨場感に緊張する。追つ手の影、崩れ落ちる馬、かすめる銃弾、コヨーテの叫び、迫る危機から脱出しようと苦闘する息子